

男女共同参画推進センター 機関誌

京からあすへ Vol.5

2024年10月9日発行

発行 京都大学男女共同参画推進センター
〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
TEL 075-753-2437
E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
URL <https://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>

制作協力 京都通信社
デザイン 中曽根デザイン



KYOTO UNIVERSITY

京からあすへ

京大からひろがる
色とりどりの未来

2024
October
Vol. 5

京都大学男女共同参画推進センター

- 02 特集
好奇心と探究心を胸に、
新たな課題に挑む
あなたを応援！
女子学生チャレンジプロジェクト

- 08 みちみちて一歩
卒業生インタビュー

川上愛美 (Nano and Advanced Materials Institute)
赤尾奏音 (日本貿易振興機構)
三宅香帆 (書評家・作家)
豊田由衣 (JSR 株式会社)
小瀧真由 (日本新薬株式会社)
澤田 華 (サントリー株式会社)

- 20 京都から世界へ！留学体験記

- 22 わたしの味方、わたしの見方

好奇心と探究心を胸に、 新たな課題に挑む あなたを応援！ 女子学生チャレンジプロジェクト



自らの好奇心と探究心をもち、新たな課題に挑戦する女子学生を支援する「女子学生チャレンジプロジェクト」。初回となる2023年度は、50を超える応募から6人が選ばれた。各プロジェクトでは、実験やフィールドワークなど活動を通して、多様な分野にわたり新たな研究の芽が生まれている



2024年度 女子学生チャレンジプロジェクト

趣旨	女子学生が、自身の興味関心に基づいて設定した研究テーマに対してチームで新しい課題にチャレンジする取組を支援		
支援対象	京都大学の女子学生・大学院生をチームリーダーとする2名以上のグループ		
採択件数	5件程度	支援額	1件100万円を上限
採択後の支援	京都大学学術研究展開センター(KURA)のリサーチアドミニストレーターが、プロジェクトマネジメントなどの研修やアドバイスを実施		
財政的支援	京都大学卒業生財界トップによる総長支援団体(鼎会)からの支援		
		支援期間	7月1日～翌年2月末

詳細は
ウェブサイトを
ご覧ください



新たな課題に挑む、 つぎなるチームが決まりました



2年目となる2024年度は、2024年4月1日に、京都大学HP、公式SNS、ポスター・チラシ等で募集告知を行いました。

その結果、理系、文系問わず、多岐にわたる分野に関する31件の応募がありました。書類選考の結果、12件が二次審査に進み、5件が採択されました。いずれもユニークな課題設定と、課題解決に向けた挑戦的な取り組みであることが高く評価されました。

採択されたチームは、それぞれに設計した研究計画に沿って、2025年2月末まで活動します。3月には成果報告会を実施予定です。

2024年度「女子学生チャレンジプロジェクト」採択者

チームリーダー	所属・学年	テーマ
松尾香奈	人間・環境学研究科 博士後期課程2年	障害・難病のある女性研究者によるフィールドワーク論の構築
桧山きらら	医学研究科 博士後期課程1年	難病患者と家族の社会的孤立・孤独対策としてのネットワーク構築を目指す —難病と共生できる社会へ—
田中花音	地球環境学舎 博士後期課程1年	「日本のダーヴィン」駒井卓資料のアーカイブ実践 —研究者資料における一元的なアーカイブズ手法の確立を目指して—
吉良花蓮	医学部 4回生	女性医学研究者のキャリア開拓プロジェクト
清水愛花	工学部 1回生	低気圧下におけるプラズマ光線形状決定機構の特定

オリエンテーション 2024年7月10日(水)



KURA(京都大学学術研究展開センター)のリサーチアドミニストレーターによるプロジェクトマネジメント研修。学生たちは、タスクの管理方法、メンバー間のコミュニケーションの取り方を学びます。研修後はグループワークを実施。プロジェクトを進める具体的なイメージを重ねました。



各チームの代表者が、取り組むプロジェクトの内容を簡潔に紹介。グループワークの効果もあり、リラックスした雰囲気の中で質疑応答や議論が盛り上がりました。

イベント終了後も、会場に残った学生たちはチームを越えて交流。プロジェクトのスタートに向けて、活発に情報を交換しました。



2023年度「女子学生チャレンジプロジェクト」実施内容

*所属・学年は2023年度のものです。

キム・スヒョン 文学研究科博士後期課程3回生
国際フォーラム:女性映画産業従事者の声を聞く—日本と韓国の映画製作労働環境と動向—

西村陽菜 文学研究科修士課程1回生
薬用作物栽培における課題・価値の再発見と地域社会での共有
—生産現場の当事者的・総合的理解を基盤に—

内藤里佳 理学研究科博士後期課程2回生
国内の食物依存症の実態調査

大坪 雅 理学研究科博士後期課程2回生
全階層統合生態学の研究—遺伝子から生態系をつなぐことで拓かれる生態学の未来

磯部よつ葉 医学研究科博士課程2回生
難病女性患者のリプロダクティブ・ヘルスを考える—就労世代の視点から—

阿部玲華 工学部4回生
女子の工学部への興味を促進するワークショップ設計のための「AIAM 心理モデル」の構築

2023年度プロジェクト 担当者からの一言



人事部職員育成課ダイバーシティ推進室

山下武史さん

2022年10月に、女子学生を応援したいという想いから、企画がスタートし、女子学生が、自らの好奇心や探求心を持ち、新しい課題にチャレンジする活動を応援するというコンセプトが決まりました。

また、募集ポスターの原画デザインも担当し、挑戦する背中をそっと押したいという、このプロジェクトの想いを、時計台を見上げる学生の後ろ姿に重ねました。

公募してみると、応募がなかったらとの心配をよそに、55件もの応募があり、選ばれた6チームは、私たちが背中を押すどころか、どんどん前に進めて、8か月という短い活動期間で、あっと驚く成果を出してくれました。

振り返ってみると、このプロジェクトは、学生支援という表面的なことだけでなく、学生の皆さんが、新しいことに取り組むきっかけをつくってくれたんだと感じています。

2024年度の採択チームも、負けず劣らずチャレンジングで興味深いものばかりです。このプロジェクトで新たな出会いや発見の芽につながってくれば大変うれしく思います。

各チームの今後の取組に、ぜひ注目してください！

11人で挑んだ薬用作物栽培の課題。 薬草と生きる人たちと出会い、 その意味を考え続ける

薬用作物栽培における
課題・価値の再発見と地域社会での共有
生産現場の当事者的・総合的理解を基盤に



ヤマトトウキの葉の刈り取り作業を体験

西村陽菜さん(当時 文学研究科修士課程1年)は、薬用作物栽培の課題や価値の再発見をテーマに「女子学生チャレンジプロジェクト」に応募。採択され、総勢11人のチームが目指したのは、生産現場や当事者に根差したフィールドワークによる課題の分析や普及のための方策の検討、さらに研究成果を地域に発信する活動まで含んだ、非常にリーチの長い取り組みでした。(執筆・南ゆかり)

輸入に頼っている漢方薬の原料

薬用作物とは、漢方薬の元、生薬の原料となる作物のことです。東洋史を専攻する西村さんは、中国の伝統的な学問で動物、植物、鉱物の薬効を蓄積する「本草学」を、その成

果を記した「本草書」から読み解いています。「普段は書物でばかり薬草を見ているのですが、実際はどんなものなのか見てみたくなって。少し薬用作物について調べると、日本は生薬の8割を中国からの輸入に依存しており、供給が不安定になるなどの問題があること

がわかりました。一方で、国内の薬用作物栽培の普及には様々な課題があるとも知り、何か課題解決に役立てないかと考えました」とプロジェクトテーマ設定の経緯を話します。

そんな西村さんの思いを受け止めたのが、サプリーダーの小林夕莉さんです。小林さんは、地理学を専攻し女性の健康に対する意識について研究しています。「漢方薬は女性の利用が多いですが、その原料や栽培の現状についてはあまり知られていません。女性の健康問題とも関わりが深く、私たち女子学生がリーダーになってやっていくプロジェクトとしてやりがいがあるなと思いました」と参加を決めた当時を振り返ります。

トウキ栽培のリアルを体感する日々

参加メンバーは、歴史学、地理学、文化人類学、熱帯農学、植物系統分類学、薬学、農業経済学、土壌学、森林科学と実に多彩なバックグラウンドを持った学生でした。「い

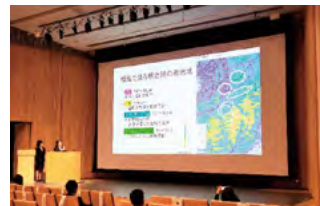
ろんな専門分野の人と協力し合うことで、薬用作物栽培の課題や価値を多面的に考察したい」と、伝手をたどって集めたそうです。

調査は、国産の生薬としては栽培が進んでいるヤマトトウキに絞り、薬用作物栽培で長い歴史がありトウキの産地である奈良県をフィールドに行いました。メンバーが分担しながら行政機関、研究センター、生産者など多方面の方々にヒアリングを重ね、さらにヤマトトウキをより大規模に栽培する北海道や群馬県でも調査しました。

生薬の原料となるのはトウキの根。薬用作物の価格は国の決める薬価から逆算して決められるため、収益化は簡単ではありません。奈良県に多い中山間地域での栽培に、大規模化や集約化がなじむのかという問題もあります。「話を聞き現場を見るほどに、トウキ栽培の問題の複雑さを実感しました」と西村さんは話します。

調査した結果はミニレポートにまとめ、チャットアプリ上に投稿してメンバー全員で共有しました。専門分野が違うと関心の持ち方も研究法も違います。「メンバーとの議論の中で新たな視点に気づかされ、問題を立体的に捉えられるのは本当に収穫でした」と西村さん。メンバーからは「異分野の学生と研究する中で、改めて自分の専門分野と向き合えた」という声も聞かれました。

当事者とともに活動しながら現場のリアリティを観察・記述する「参与観察」という調査法を取り入れたのも特色です。250年の歴史を誇る森野旧薬園の薬草管理をはじめ市民の運営による薬草農園の活動や、地域おこし協力隊として活動する久保田勝典さんのトウキ栽培に密着。畑で除草作業など



左上／武田薬品工業株式会社の薬用植物園でポスター展示を行い、研究成果を発信

右上／「奈良漢方マルシェ」の会場内でもポスターを展示(中が西村さん、右が小林さん)

左下／専門家向けの研究発表会で、地理学・農学の視点での研究成果を発表する小林さん

右下／小学生を対象にした薬草に触れるイベントを開催。薬草で入浴剤づくりを楽しむ

を体験し、育て方のノウハウや薬草への思いを聞きながら、地域の人々と薬草とのかかわりを丹念に考察し、薬用作物の価値を見出そうとしています。

人々とのつながりも大きな成果

各メンバーが分析した成果は、2024年3月に報告書にまとめました。その成果について西村さんは次のように話します。「薬用作物栽培の拡大につながる、何か決定版のような解決策が出てきたわけではありません。ただ、中山間地域での薬用作物栽培の現状を知り、それについて考えるヒントは提供できたのではないかと思います。自

分にとっては、研究において個々の事象に丁寧に向き合う大切さを痛感する経験となりました。

研究成果の発信については、プロジェクトが終わった後も学生団体を立ち上げて「京大薬草子ども教室」として活動を継続中。学部生を中心とするメンバーに引き継ぎ、高校生との共同研究や小学生を対象としたイベントや講座を行っていく予定です。

こうして新たな絆を結び直し、「研究にご協力いただいた地域にお返ししたい」と話す西村さん。協働した仲間や地域の様々な人々とのつながりが、今回のプロジェクトから得たもう一つの成果なのかもしれません。



上／メンバーにとって薬草に触れる貴重な機会になった(真ん中が西村さん、右端が小林さん) 右上／久保田勝典さんの指導で、野山の身近な野草について学ぶ 右下／ウォッカに漬けたハーブチンキなどヤマトトウキの葉を使った商品づくり



代表者 西村陽菜さん

文学研究科 歴史文化学専攻 東洋史専修 修士課程2年

多様な考えを持ったメンバーをどうまとめるべきか悩み、試行錯誤を重ねました。結局まとめるというよりは、個々の視点や自主性を尊重しつつ影響を受け合えるような関係ができました。人と人がつながる経験を通じて喜びと苦労を知り、成長することができたと感じています。

地元長野から京都、そして世界へ。 新天地で広がる視野が挑戦の証

川上愛美さん

Nano and Advanced Materials Institute

長野県伊那北高等学校 出身
薬学部 卒業、薬学研究科修士課程 修了



京都大学への進学を考えはじめたきっかけは、オープンキャンパスです。当時の私にとって、生まれ育った長野県から県外の都市に一人で飛び出すのは、大きな勇気のいること。進学塾のない町で、自己流の受験勉強に明け暮れる日々。そんな状況でもモチベーションを高くもちつづけられた理由はというと、京大に「一目惚れ」したからとしか言えません(笑)。

進路選択の幅を広げた、 授業での一言

合格が決まり、移り住んだ京都での暮らしはカルチャーショックの連続でした。まず、自動車なしでは買いのものにも行けない地元と違い、自転車でどこにでも行けるのが衝撃的。そして、なにより「自由の学風」です。当時は取得単位数に上限がなかったので、1日5コマの週25コマ、授業を詰め込んだこともありました。薬学部は生物学や有機化学など、多分野の知識を学びます。わかることが



私に大きな影響を与えた平竹先生のポケットゼミ。学部3回生のころには、ティーチング・アシスタント(TA)として授業をサポートしました

日に日に増える楽しさに突き動かされ、勉強にとことんのめり込めたのも京大の空気あればこそ。どんな過ごし方でも許容してもらえる雰囲気は、とても居心地のよいものでした。

転機は、1回生で受講した平竹潤先生(故人)のポケットゼミ(現・ILASセミナー)「きてみてさわって、有機化学が死ぬほど好き」。私の専門である有機化学のおもしろさにふれたきっかけの授業です。ここで平竹先生から、「人と同じ人生を歩むのはおもしろくない。きみには引込み思案なところがあるから、海外に行ってみるといいかもね」と言われたのです。国内の引越しですらそうとうの覚悟だった私にとって、留学は遠い世界の話。でも、その一言に揺さぶられて、英語の勉強にも力を入れはじめたんです。

そうして3回生の夏、交換留学の制度を利用してカナダに。驚いたのは、10代で京都に来たときほどのカルチャーショックを感じなかったこと。「思ったよりも違いはないんだ」という実感は、進路選択の幅をぐっと広

げました。京大大学院の修士課程に進み、研究者としての基礎をしっかりと身につけたあと、博士課程はアメリカの大学院を選びました。挑戦を決めたのは、「人と同じはおもしろくない」の精神からです。

全世界を視野に入れた就職活動

現在は、香港にある Nano and Advanced Materials Institute(NAMI、納米及先進材料研發院)で研究員として働いています。ナノテクノロジー技術を駆使した新材料の開発を軸に、企業と連携して製品開発をしたり、政府から研究費を受けて研究員それぞれが独自の研究テーマを追っています。



アメリカでの博士課程卒業式のあと、ラボの同期メンバーと一緒に記念撮影

就職活動では、世界中のどこにでも行くつもりで企業を探しました。最終的には、パートナーの香港での就職をきっかけに、香港の企業に焦点を絞り、建設やエネルギー、ヘルスケアなど多様な課題に取り組む会社に就職。2年めを迎え、環境負荷の少ない冷媒の開発に挑んでいます。まずは製品化して、市場に出すことが目標です。薬学部出身ですから、将来はヘルスケア分野にも携わりたいと夢を描いています。

選択肢を選ぶとき、選んだ理由は説明できなくてもいいと思うんです。「楽しそうだな」、「やってみたいな」、そんな気持ちで気軽に選択しながら進んだ一歩一歩が、自分だけの道をつくるはずですよ。

column 休日の過ごし方

香港の印象は、料理がおいしくて、暑い場所。アメリカにいたときにはじめてポルダリングを香港にきてからもつづけています。



自転車で走り回った日本列島。京大だからこそ出会えた景色を胸に、地域の課題にアプローチ

赤尾奏音さん

日本貿易振興機構（ジェトロ）

大阪府立天王寺高等学校 出身
総合人間学部 卒業



「京大イチ自由な学部」という謳い文句に惹かれ、総合人間学部のオープンキャンパスに参加しました。企画も運営もすべて学生たちが取りしきっていて、キャンパス内には嘘偽りなく「自由」な雰囲気が広がっていたんです。当時の模試の結果はE判定で、向こう見ずの挑戦でしたが、受験の決意を固めました。

京大らしいアルバイト、利尻島での昆布干し

総合人間学部は文理を問わずに学べる学部。ゆえに同級生の興味の幅もとても広く、友人たちの「好き」の話を聞いているうちに私の世界も広がりました。でも、私かというと、なにか一つを追求するよりも、興味の赴くままに挑戦してできるだけ多くの経験を積みたいタイプ。自転車サークルのメンバーと3週間かけて北海道を一周したり、国際寮で留学生と一緒に暮らしたり、ニュージーランドに留学したり、思いつかぎりの学生生

活を満喫しました。根室岬、与那国島、波照間島、宗谷岬と、自由に行き来できる日本の東西南北の端の地すべてに降り立ったのは、ちょっとした自慢です（笑）。

なかでも強烈な思い出は、北海道利尻島で

の昆布干しのアルバイト。京大卒業生と地元漁師とが協力して、6月下旬から8月の昆布干しの繁忙期に京大生を派遣するプロジェクトです。島の空き家に10名前後が集まり、共同生活しながら働きます。参加のきっかけは、吉田南構内の掲示板に貼られた募集チラシ。時給の高さに心が動いたのも正直なところですが、自転車の旅で訪ねた利尻島が大好きだったのが即決の理由。島の中央にそびえる利尻山の存在感に圧倒



日本の最東端の根室市納沙布岬で



干し終わった昆布。雨が降ると昆布干しはできないので、晴れの日が勝負。作業が終わると、島民の方がふるまってくれる利尻島の海産物を楽しみました



され、いつでもこの景色が見られるよう、いまもスマートフォンのケースに写真を忍ばせているほどです（笑）。

利尻島にとって昆布干しは島民総出の大仕事。島民のみなさんと一緒に、朝3時から4時間ほどかけて昆布を干します。干し終わると、正午の手入れと夕方の回収以外は自由時間。オンラインで大学の講義を受ける人もいましたが、私はラーメン店でのアルバイトや、地元高校との交流に参加したりして過ごしました。島民の方が島の食材でつくる絶品の朝食も忘れられません。就職したいまも毎年夏に島を訪れて、昆布干しや夏祭りを手伝います。島での経験は一生ものの財産です。

背伸びしてもいい。まずは掴むことがだいじ

日本各地を実際に訪ね、地域それぞれの景色や食、人の暮らしを肌で感じました。過疎・高齢化などの地域の課題を目にすること

も多く、地域活性化に寄与できる方法を探して日本貿易振興機構に入構しました。主として取り組むのは、海外企業の誘致。地方自治体や地元企業とつなぎ、雇用の創出や地域の活性化をめざします。ジェトロは47都道府県すべてと、国外55か国に事務所があります。学生時代のように興味の幅を狭めず、入構から3年めのいまはチャンスがあればどこにでも赴くつもりで、幅広い仕事に対応できる底力を身につけたいです。

「届かない」と見上げなければならないものでも、背伸びして手を伸ばせば、案外届くことがあります。京大で出会った景色は、「E判定だから」と諦めていたら出会えなかったものばかり。思い切って手を伸ばして、悔いのない学生生活を掴んでください。

column 休日の過ごし方



休日は、登山やキャンプなど、自然のある場所で過ごします。サーフィンもはじめました！

来る日も来る日も読書に暮れた大学時代。 試行錯誤で紡いだデビューへの道

三宅香帆さん

書評家・作家

高知県 高知学芸高等学校 出身
文学部 卒業、人間・環境学研究科 博士後期課程 中途退学



大学時代を過ごした京都は、まち全体が1つの寮のようでした。近くに住む友人たちと終電を気にせず夜明けまで喋りとおすなんて、人生でもう二度とない時間だと懐かしく思い出します。授業が休講になればとつぜん2時間弱の空きができたり、部活と勉強で余白のなかった高校時代とは違う時間のあり方に「自由」を感じたものです。そんななかで明け暮れたのが読書でした。

思いがけないバズが生んだ作家デビュー

幼少期からの読書好きが高じて、文学部に進学。とくに日本の古典文学が好きでした。千年前の言葉がいまに伝わっていることそのものへの驚きと感動に心を震わせながら、言葉に遺る昔の人たちの考えに思いを馳せました。ほかにも、ありあまる時間をつかって好きな小説家の作品を片っ端から読んだり、一人の作家を起点に影響元や系譜をとことん辿ったり、新しい本と出会うこと



佐野宏先生の研究室のメンバーと。ここで学んだものを読んだり書いたりする技術がいまの自分の基礎になっています

で世界を広げてゆく大学時代でした。

研究を通して培った書物を読む技術も、大学時代の財産です。当時、私と同じような熱量で本と向き合い、たくさんの解釈を「読もう」とする人になかなか出会えない寂しさがあったのです。そんなとき出会ったのが佐野宏先生。一つの書から、私よりももっともっとあらゆることを「読める」姿に憧れて大学院進学を決めました。

いっぽうで、つねに頭の片隅に付きまとっていたのが将来への不安。この先の生き方がわからないまま、不安を払うように読書と研究にのめり込みました。そんなとき、アルバイト先の書店のブログに書いた一本の記事が転機をもたらしました。好きな本を紹介したい一心で、本への思いを短評としてしたためたものですが、この記事が反響を呼び、多くの方に届いた。このバズをきっかけに生まれたのが、デビュー作『人生を狂わす名著50』(ライツ社)です。

兼業作家から専業作家への転身

暗中模索のなか、書評を書いていると「これは私のやりたいことだ」と思えてホッとしたんです。書きつづけられる環境を求めて、会社員と書評家との兼業の道を歩みはじめました。就職先は人材サービスを提供するIT企業。目まぐるしく移り変わる世間のニーズを拾い、求められるものを提供することは新鮮で楽しく、忙しさすらも楽しんでいました。その反面、流行に振り回されるしんどさを感じたり、「疲れて本が読めない」自分にも気がついて、3年半後、執筆活動に注力すべく退職しました。「この本を読んでほしい!」。書評を書きはじめたときから変わらない思いと、働いたからこそ得た視点もいかながら、本の魅力を伝える活動をつづけています。



鴨川で友人たちと

競争が激しく、せわしない時間のなかでも、自分だけの「好き」の気持ちのおかげで軸を保っていられました。京大で出会った友人たちは、それぞれが特別に好きなものや追いかけているテーマをもっていました。先生たちは1人の人間として学生と対等に向き合って、「君の専門分野はなんですか」と問うてくれる。こうしたやりとりから受けた影響ははかりしれません。京大は夢中になれるものを見つけられる場所。周りの声を気にしすぎずに、好きなことに没入させてくれる京大の時間が私をつくってくれました。

column 近刊の紹介



2024年の上半期に『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』(集英社新書)、『娘が母を殺すには?』(PLANETS)の2冊を上梓しました。前者は、企業で働いた経験にも着想を得て、労働と読書の歴史をひもといたもの。後者は、小説や漫画、ドラマなどのフィクション作品を参照し、戦後の「母と娘」の関係を論じた文芸評論です。

工学と生命科学の〈境界領域〉でものづくり。 困難も楽しんで、暮らしを変える新材料を創る

豊田由衣さん

JSR 株式会社

京都市立紫野高等学校 出身
工学部 卒業、工学研究科博士後期課程 修了



大学に「工学部」という学部があることを知ったのは高2のころ。京都大学が高校生向けに開く科学講座「ELCAS」への参加がきっかけです。理学部が提供する化学の講座を受講しました。化学講座なら、もともと関心のあった生物も、物理も学べそうだったのが理由です。授業後に先生と話して気がついたのは、私は生物そのものを解明するよりも、細胞などの仕組みをつかって、なにか「もの」をつくることに興味があるということ。先生からの「それなら工学部はどう？」の一言が進路を決めました。

がん細胞を見つける 〈探索物質〉の合成に没頭

入学後は軽音楽部に入部して、バンド活動に熱中。とはいえ、私の大学時代の記憶のほとんどを占めるのは、博士課程まで6年間没頭することになる研究のことばかりです。取り組んだのは、体内のがん細胞を見つけるためのプローブの合成です。私が着目した



研究室対抗のソフトボール大会

のは、がん細胞の呼吸。増殖時はとくに呼吸が活発になるので、がん細胞の周辺は酸素が薄くなります。体内の酸素濃度の薄い場所を見つけられるプローブを新たに合成しました。つくるだけでなく、私のつくった「もの」が実際に機能する姿を見ることがなにより楽しい瞬間でした。

卒業や修了の岐路のたびに、就職するか、進学するか迷いがありました。進学を選んできたのは、実験をすればするほど、できることが増える手ごたえがあったから。もっともっと突き詰めれば、どんな景色が見えてくるのだろうという好奇心が迷う心の行き先を決めてくれました。

ずっと変わらないものづくりへの志

博士課程の修了後はアカデミア以外の世界をのぞいてみよう、就職活動をはじめました。私の強みは、工学部でありながら、生命科学の分野でものづくりをしてきたこと。一方で、創薬や医療分野で活躍するには、薬学や生物学の領域で学んできた人たちに専

門的な知識量で敵わない部分があることも実感していました。〈境界領域〉にいる私だからこそできることをいかせる場所を探して、半導体材料や試薬材料など、多岐にわたる材料の開発に挑戦できるJSR株式会社に就職しました。

5年目のいまは、医薬品の安全性や効き目などに影響する、医薬品添加剤の研究開発に携わっています。一つのテーマをじっくり突き詰める学術研究とは違って、企業の研究開発のゴールは、世間のニーズを的確に掴んで開発を進めて、できるだけ早く上市に結びつけること。開発・製造コストのシビアな検討も必要です。向き合い方は大きく変わりましたが、世の中に役だつ「もの」をつくりたいという思いは変わりません。開発した材料が街のなかでつかわれる日にいつか立ち会いたいです。

京大で育まれたのは、困難な状況のなか



先輩で同じく京大工学部卒の王怡今さん（広報部）と。他部署の人たちとの交流もさかん

でも「おもしろい」ことを見出す姿勢。実験に失敗はつきもので、意気揚々と取り組んでも結果が出ないこともある。もちろん落ち込みますが、見方を変えれば、「この方法ではできない」ことがわかったとも言えるんです。受験勉強でも同じで、模擬試験の点数だけを見て一喜一憂するのはもったいない。失敗はつぎにいかせるヒントの宝庫です。

column 休日の過ごし方



2023年の長期休暇で訪れたシンガポールにて。休日は、近場のカフェをめぐって読書をするのも好きですが、連休などをつかって国内外を旅するのもしフレッシュになっています。

京都のまちで育んだ、コミュニケーションのいろはが 新薬のポテンシャルを引き出す鍵に

小瀧真由さん

日本新薬株式会社

広島県 ノートルダム清心高等学校 出身
薬学部 卒業、薬学研究科修士課程 修了



高校時代に夢見た進路は、化粧品の研究開発。いろいろな大学・学部の卒業生の進路を見比べていると、京都大学薬学部のページに化粧品会社の名前がありました。「ここなら夢に近づけそうだ」と、志望校を京都大学に絞って、勉強に励みました。

入学して驚いたのは、京大生の経験値の高さ。私は高校まで勉強しかしてこなかったのに、スポーツや趣味など、勉強以外の得意分野をもつ人がたくさんいたのです。劣等感を覚えたりもしましたが、だからこそ大学では後悔のないように挑戦しようと決めました。

アルバイトをとおして出会った 新しい価値観

長期休暇のたびに海外旅行をしたり、ダンスサークルに力を注いだり、もちろん勉強も全力で取り組みましたが、いちばん糧になったのは先斗町の飲食店でのアルバイトでした。高校や大学で出会う人たちは、自分

と同じような環境で育ち、同じような世界を見てきた人たちが多かった。でも、飲食店には料理人をめざして専門学校で修行を積むアルバイト仲間がいたり、海外からのお客さんもたくさん迎えました。これまで知らなかった価値観にたくさんふれて、世界が大きく広がったのです。

こうした経験で気がついたのは、私はコミュニケーションをとることが好きなんだということ。薬学部で学んだ知識をいかしつつ、周りの人たちとコミュニケーションしながら仕事ができる職種を探して、臨床開発職に辿り着きました。

新しい薬を安心・安全に患者さんに 届けるためのルールづくり

臨床開発は、開発した薬の有効性と安全性を検証し、薬を製造販売承認まで導く仕事です。私の担当は、実際に患者さんに投与して薬効を検証する、治験のデザイン。研究部から「薬のタネ」を受け取って、データや



1、2回生はダンスサークル漬けの日々。女子学生だけのサークルだったので女子高出身の私にはかなり落ち着く居場所でした



バリ旅行での一枚。閑宮が台風で沈んで帰国できず、急遽延泊して予定になかった街に行ったり、思い返すとドタバタを楽しんでいました

分析結果をもとに、薬を1日に何回、どれくらいの期間投与するのが効果的かなどを考えます。薬のポテンシャルを発揮できるかどうかを左右する、重要な役割です。

この仕事には、治験に協力いただく病院の先生がたの協力が不可欠。どう伝えれば先生がたに動いていただけるのか、患者さんに安心いただけるのか、相手の立場に立って頭を悩ませます。医療現場と、利益を追求する企業とでは考え方が違う部分も多く、すり合わせに四苦八苦しますが、そのぶん達成感は大きいです。

他部署とのやりとりも頻繁な職種なので、就職活動で重視したのは会社の雰囲気。日本新薬の面接は、肩肘を張らずに話ができる雰囲気をつくってください、入社して働く想像がいききに膨らみました。海外の部署やパートナー企業とのコミュニケーションも積極的に行えることを知り、国際的な視点をもつことができることも決め手でした。こ

れからも社内外の人たちとコミュニケーションを重ねて、京都から世界に薬を届けることができるよう、力をつけたいです。

大学時代から心がけているのは、最終的なゴールの前に、小さなゴールを設定すること。「薬のタネ」の発見から製品の上市までに10年はかかります。目標を見失わないように、「いつまでにこの業務を完了させる」、「この進め方について他部署や先生方からの合意を得る」など、細かな目標を設定するんです。受験勉強でも、「合格」までに小さなゴールを設定すると、モチベーションが維持できるはず。とはいえ、合格もまた、人生という長い道のりの途中。勉強した先になにがあるのかを考えながら、いつか大きな実を实らせてください。

column 休日の過ごし方



旅行はいまも変わらず好きです。この写真は、会社の同期と入社後に初めて行った韓国への海外旅行です。最近、バスケット観戦にもハマっています！

人生を彩る「食」に導かれて進む道。 自慢の商品を売り場でもっと輝かせたい

澤田 華さん

サントリー株式会社

大阪府立天王寺高等学校 出身
農学部 卒業



負けず嫌いな性格で、どうせなら関西一の大学に入りたい！と京都大学を志望。でも、高2のころ、二度入院をしたんです。入院中は断食をしたのですが、もう食べもののことしか考えられなくて……。人間の体をつくる食事の大切さを身にしみて感じて、食のことを学ぼうと、農学部の食品生物科学科をめざすことにしました。

4年間で約1,000軒以上を食べ歩き！

大学時代の私は、関西のお店を食べ歩いて、SNSに記録するのが日課。大学4年間で1,000軒以上のお店を訪ねました。ちなみにSNSはいまも欠かさず更新しています(笑)。そんな日々を過ごしていると、おのずとお店の方や、同じく食べ歩きが好きな人たちとのつながりができました。食に関するイベントを企画して運営したり、コミュニティをつくったりしながら、人に関わる仕事、人に喜んでもらえる仕事への関心が膨らみました。



カメラは必需品(いまはもっと大きなカメラを使っています)

入学当初は、大学院に進学して研究職をめざす道を思い描いていました。でも、3年生になり、毎日、午後の実験室で実験する日々がはじまって、「これから何十年もこれをつづけられないかも……」と迷いが生じたのです。研究職＝実験室でずっと仕事をする、というわけではないと思いつつも、実験室という一つの場所にこもる生活がしっくりこなかった。興味があった研究室の教授が他大学に異動されるタイミングだったことも、方向転換の大きな理由でした。

そうして、研究職ではない職種へと舵を切りました。製品や商品として「モノ」を扱う仕事を探して、食品・消費財・化学メーカーを軸に就活。サントリーホールディングス株式会社に入社しました。

「やりきった！」の達成感を求めて 仕事に全力投球

現在はサントリー株式会社・近畿圏統括支社広域営業推進部で、自社製品を扱ってくだ

さる量販店の酒類カテゴリー伸長・課題解決のための情報分析や提案、取組の推進を行っています。これまで、財務部・デジタルマーケティング部(宣伝部)と、まったく異なる部署を経験してきましたので、さまざまな部署を経験した自分にしかできないことはないだろうかと、日々考えながら仕事をしています。営業部門では自身の働きが数字というわかりやすい結果で表れる。それがプレッシャーでもあります。みずからの仮説と提案した解決策がはまり、効果が表れることは、やりがいにつながっています。現部署に異動して2年になりますが、「やりきった！」と思える仕事をするのが当面の目標です。

学生時代の後悔は、いろいろと言いつけて海外留学をしなかったこと。理系で留学する人は周りにほとんどいなかったのですが、いま考えれば、きっとなにかしらの方法があっただろうと思うのです。京大をめざす



食品生物科学科の人数は35名程度。みんなで旅行したさいの一枚

みなさんは、私に言われなくても勉強はしっかり進めているはず。私から伝えたいのは、勉強はさておき、「学生のあいだにしかできないことに力を注いでほしい」ということ。あのときにこれ以上ないほど、熱中した学生時代の経験やともに過ごした友人が、いまもずっと私を支えてくれています。

column 休日の過ごし方



2023年のチェコ旅行(写真上)。年に1回はヨーロッパに行きたくて、コロナ禍以外は毎年旅行に行っています。ことしはドイツに行く予定です。最近推し活も楽しみながら、休日に英気を養っています！(写真下)



京都から
世界へ！

留学体験記

留学先 スイス

近藤里咲さん

教育学部教育心理学系 3 年生

ローザンヌ大学(交換留学)

2 年生のころに6か月
(9月～3月)

私がスイスでたさんの人のお世話になったように京大にくる留学生の手助けをしたくて、帰国後は国際交流のイベント企画などに積極的に関わっています

難しくても留学を諦めたくない！

絶対に行くたくて決めていた留学。でも、私の専攻は授業が忙しくて、留年せずに留学するのはほぼ不可能。だけど諦めきれず、授業を4コマみっちりと週5で受けて必要単位を取りました。相談した教職員の方も協力的で、心置きなく留学に臨めました。

スイス独自の環境にびっくり

スイスとはとにかく風光明媚で、キャンパス内には羊が悠々と歩いていました。住まいは、約900もの部屋がある学生寮。寮内には、パン屋、カフェなどがあり、充実した環境。なんと屋上にはバーまでありました(笑)。一方で、スイスには「夜10時以降は騒音を立てない」というルールがあります。いちど10時を過ぎて寮で話をしていると、警備員に注意されたことがありました。

スイスで解放できた「自分らしさ」

スイスでは、自分らしくいられる感覚がありました。慣れない土地ではトラブルがつきものですが、周囲の助けも借りて対処し、「強くなったな」と自信ができました。現地の友人にも、「自立しているね!」と褒められ、嬉しかったです。スイスでは社会全体がゆったりしていたせいか、日本帰国後は、満員電車や物の多さに逆カルチャーショックを受けたほどです。



余暇はヨーロッパ旅行を満喫。安ければ片道3,000円ほどで飛行機に乗れるので、10か国以上を巡りました。ヨーロッパには長期の留学生なら無料で入館できる施設も多く、ルーブル美術館などを楽しみました。写真はブダペストで撮影

せっかくの機会。挑戦しなければ損

慣れるまでは会話のスピードに追いつけず、もどかしい思いもしました。せっかくの機会、心掛けたのは勇気を出して自分から話しかけること。でも、もっともっとその機会をつくれればよかったとの後悔も……。

留学先 スコットランド

中岡 萌さん

総合人間学部 4 年生

グラスゴー大学(交換留学)

2～3 年生のころに1年
(9月～6月)



左/羊の内臓を羊の胃袋に詰めたスコットランド料理のハギス 中/寮のフラットメイトたちと 右/グラスゴー大学

創立573年、ゴシック様式の校舎で学ぶ

宗教学を学べる英語圏の大学という条件で留学先を探しました。日本の大学と違ったのは授業形態。一つの科目につき、1時間の座学形式が週3～4日、ディスカッション形式が1日と、毎日科目にふれることが重視されています。1451年創立の歴史ある空間で学ぶ時間は格別でした。

芯の強いフラットメイトとの寮生活

学生寮は寝室こそ個室ですが、キッチンや浴室は4人のフラットメイトと共有です。彼らはみんな「パーティ・ピープル」で、毎日、音楽をかけて騒ぐんです(笑)。一人の時間がほしい私は自室で休むことも多かったのですが、他者の決定を尊重するのが当たり前で居心地はよかったです。でも、悩みを相談しても「あなたの好きにすればいいよ」と言われる(笑)。「私はあなた

From Kyoto To the world!



月に一度は旅行に出かけました。印象深いのはウィーンとギリシア。世界史が大好きだったので、教科書に出てくる場所を「聖地巡礼」するような気持ちでした。その地を実際に感じると、知識がぐっと深まるんです。写真左はギリシア・クレタ島のクノッossos宮殿、右はウィーンのシュテファン大聖堂

ならどうするかが聞きたいのに!」と思うこともしばしばでした。

もっと日本のことを説明できれば……

留学先の友人たちは、私を通して日本のことを知ろうとしてくれます。日本の政治や法律、文化など、友人の疑問に答えられなかったのが心残り。自国のことをもっと勉強しておくべきだったというのが反省点です。

留学先 スウェーデン

井上桃子さん

法学部 4 年生

ウプサラ大学(交換留学)

3 年生のころに10か月
(8月～6月)



左/留学中に暮らした都市ウプサラで出会ったオーロラ 中・右/10か月を過ごした思い出深い寮のキッチンと自室

共同生活の楽しさととまどい

寮選択の軸は個室であることと、できるだけ家賃が安いこと。パーティ好きの寮生が多く、夜に音楽を流して踊りはじめるのは日常茶飯事。毎夜、にぎやかなことに最初はとまどいました(笑)。友人もできて楽しい寮生活でしたが、共同生活ゆえのしんどさも。共用キッチンに食器が洗わずに放置されていたり、冷凍庫が半開きだったり……。見つけると口頭かチャットで、はっきり注意するようにしていました。

現地ならではのボランティア活動

授業の空き時間を活用し、フードバンクのボランティア活動に参加しました。飲食店などから余った食品を回収し、市民に無償で配布します。国籍も職業も多様なメンバーとの交流の輪が広がりました。利用者には路上生活者の方もいて、「福祉が手厚い」というスウェーデンのイメージとは違う現実を目の当たりにしたことも印象深いです。

留学先 オーストラリア

山崎友里加さん

薬学部薬学科 4 年生

シドニー大学(交換留学)

2 年生のころに5か月
(8月3日～1月5日)



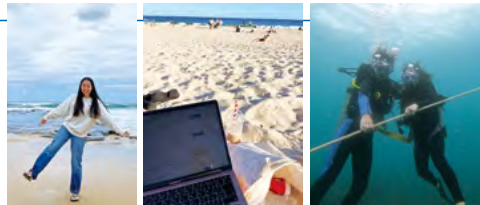
オーストラリアを満喫しつつ、勉強も懸命に取り組みました。授業は日本とは違い、実践的な薬学の授業が多かったです。いつもと違う環境だからこそ学べることがあると実感し、3年生ではアメリカに研究留学しました

寮のキッチンで世界の味めぐり！

住まいは大学寮。夕飯は自炊が中心でしたが、オーストラリアの食品スーパーは一袋あたりの量が多い! (笑) 最初は食材のやりくりにも悩みましたが、慣れてくると友人と集まってそれぞれの出身国の料理をふるまう機会が増えました。私の得意料理は唐揚げ。好評で嬉しかったです。

海外留学で育てた自信と将来のビジョン

将来は海外での進学や就職も視野に入れていました。留学のきっかけには、自分が海外の生活や環境に適応できるのか試したい思いもありました。約5か月のオーストラリア生活を経て、「海外でもやっていける!」という自信ができました。オーストラリアを気に入って、オーストラリアでの進学や就職も具体的に描き始めています。現地の修士・博士課程の友人もできて、進学のアドバイスを受けられる心強さも感じています。留学経験で、将来のビジョンがより明確になり、



高校時代にカナダで短期留学をしたので、「つぎは南半球だ!」とオーストラリアを選びました。大学から20分バスに乗れば海に着くので、時間があれば海にいました(笑)。地元の人たちも海で読書したり、昼寝をしたり……。私たちが京都の鴨川で過ごすように、海は身近な存在なんです

海外での生活やキャリアへの期待と自信が高まりました。

雪の降らない、夏のクリスマス

いちばんの思い出は、クリスマスのロード・トリップ。友人たちと車のトランクに3日ぶんの食料を詰め込んで走り回りました。オーストラリアのクリスマスは真夏。サンタクロース姿のサーファーがいる光景は、不思議で忘れられません!



Recommend

わたしの味方、 わたしの見方

立ち止まったとき、
いつか読んだ・観た作品に
ふと背中を押されることがあります。
今号に登場いただいた方がたに、
高校生のみなさんに
手に取ってほしい作品をうかがいました。



『わたしの美しい庭』

凧良ゆう 著

(ポプラ社)

マンションの屋上庭園にある「縁切り神社」にやってくる〈生きづらさ〉を抱えた人たちを描いた短編集です。私がこの本を手にしたのは香港に来てから。世間の思う幸せとは異なる「幸せの姿」をもつ人たちの物語は、私の考え方とも共鳴する部分が多く、心に沁みました。「誰かに証す必要なんてなく、わたしはわたしを生きていけばいい」という一節は、私のお守りです。



川上愛美さん



赤尾奏音さん

『夜は短し歩けよ乙女』 森見登美彦 著

『鴨川ホルモー』 万城目 学 著

(ともに KADOKAWA)

京都大学出身の作家による小説です。どちらも京都大学周辺を舞台に、主人公たちが青春や恋愛模様をくりひろげます。京都での生活に憧れるきっかけになりました。とくに『夜は短し歩けよ乙女』の学園祭のカオスなシーンには心惹かれました。1回生のときにNF(京都大学11月祭)で模擬店を出したのですが、小説の世界を実感できたのがうれしかったです。



小瀧真由さん

『グレイテスト・ショーマン』

マイケル・グレイシー 監督

19世紀に実在したショーマン、P・T・バーナムの成功を描いた映画作品です。歌・ダンスのパフォーマンスに魅力があるのはもちろんのこと、バーナムの発想力と行動力にとっても感銘を受けました。過酷な環境もポジティブに捉え、思いついたアイデアを主体的に進める姿勢、他人を巻き込み動かすカリスマ性……。なにかを成し遂げるためには自分の考えに自信をもつこと・自分を信じるのがいちばん大切だと感じさせられます。自分の挑戦に悩んだときや思いとどまったときにモチベーションを高めるのにおすすめの作品です。

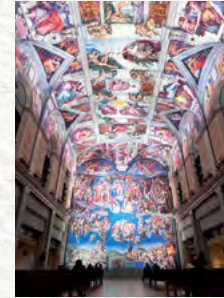


三宅香帆さん

大塚国際美術館

(徳島県鳴門市)

古代壁画から現代絵画までたくさんの世界の名画が、特殊技術でオリジナル作品と同じ大きさに複製されて展示されています。日本の中でもとくに海外にいる気分になれる場所で、海外旅行に行きたくても行けないときに訪れて癒されています。ぜひいちど訪ねてみてください。



澤田華さん

『大学受験のための小説講義』

石原千秋 著

(筑摩書房)

大学受験国語の本……に一見思えるのですが、じつは石原先生が「読むとはどういうことか」について、受験の枠を超えて伝えてくれる本です。小説を読むって、簡単なようで、じつはすごく技術が必要な行為。それを私は本書で知りました。大学受験に必要な国語の知識も身につきますし、それだけでなく、小説を研究する楽しさを教えてくれる本でもあります。受験勉強の合間にぜひ読んでみて、文学批評っておもしろそうだなと感じた方は、ぜひこちらの世界へ！



豊田由衣さん

『コーヒーの科学』

「おいしさ」はどこで生まれるのか

旦部幸博 著

(講談社)

私たちの暮らしに欠かせないコーヒーについての科学的な考察を、医学者であり、コーヒー好きの著者がまとめた書籍です。歴史や植物学、経済学、抽出を科学的に解説するなど、本の中で文理の枠を超えた科学が広がっています。一つのことをこれほど多角的に分析できるのかと驚きました。一つの興味があれば、あらゆる方向に可能性が広がることを教えてくれた本です。

